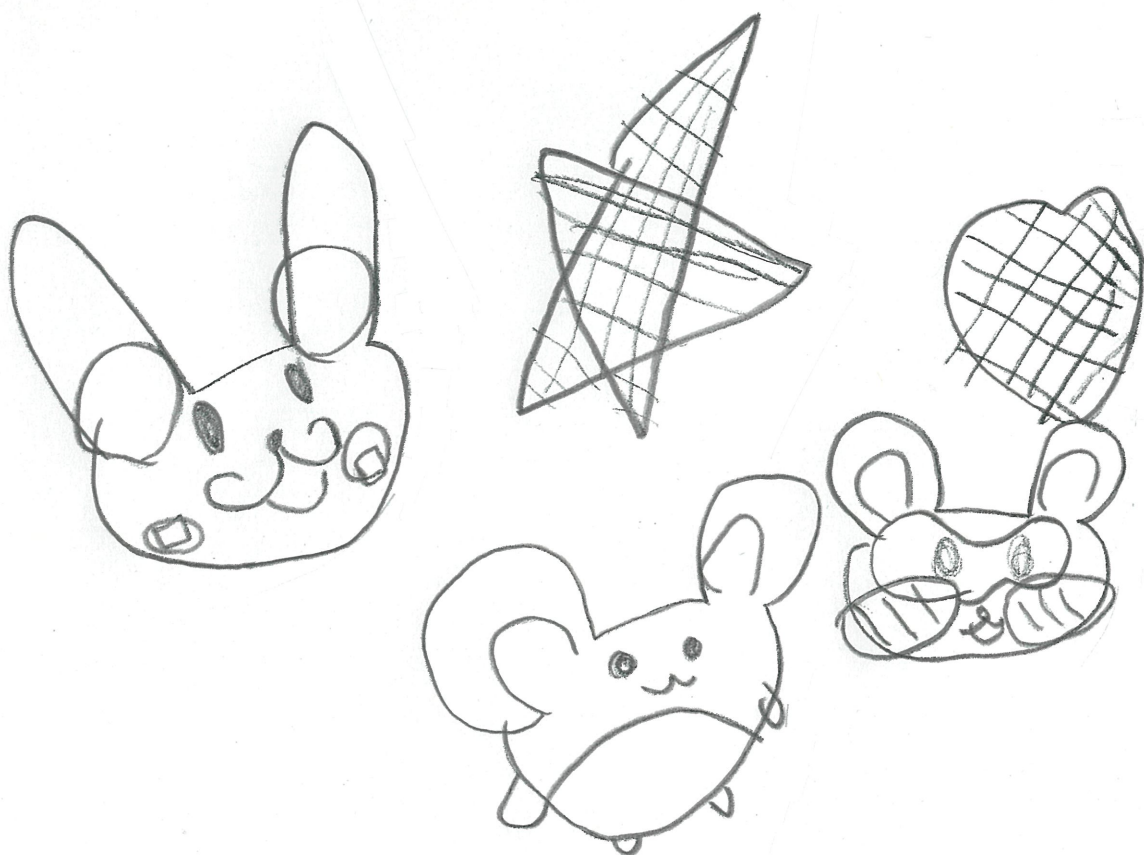


令和6年度 園内研究紀要

《研究主題》

「伝え合い・学び合いを通して育む、
確かな学びと豊かな心」

～心と体を弾ませ、主体的に取り組める環境づくり～



真鶴町立ひなづる幼稚園

1 研究主題

「伝え合い・学び合いを通して育む、確かな学びと豊かな心」

～心と体を弾ませ、主体的に取り組める環境づくり～

2 主題設定の理由

一昨年度から本研究主題で研究に取り組んだことで園の環境を見直し、保育の在り方や環境構成についての話し合い、日案・週案等の計画の見直し・改善を行ったことにより、環境設定や安全配慮も明確になり、保育の振り返りや環境づくり、子どもの見取りについての理解が深まった。また、サークルタイム（話し合いの時間）を導入し継続することで、子ども同士の対話も増え、自分たちで考える力の育成にも繋がった。さらに、研究を進める中で課題もたくさん見えてきた。

町の少子化に伴い少人数保育の中で、課題を乗り越える体験をどのように支え関わっていったらよいか。幼児が身近なものに自ら関わり、自発的な活動としての遊びがより充実・継続・発展するための環境づくりはどうしたらよいか。「幼児教育の重要性・遊びの大切さ・主体的な保育の在り方」などを保護者にいかに伝えていくかである。こうした課題解決に向けて、子どもの思いや主体性を大切にしていける保育の探求・展開を引き続き大事にし、今年度も研究を進めていくこととした。

3 研究の内容

- 子どもの思いや主体性を大切にした保育を探求・展開する。
- 子どもたちが作り出した遊びが充実、継続し、発展できる環境づくりの工夫に取り組む。
- 幼保小中の12年間の子どもの育ちの連続性を大切に、特に幼保小の円滑なプログラムの推進に取り組む。
- 園が取り組んでいることや大切にしていることを保護者に伝える。
- 年間を通して幼小中の教師同士がお互いの保育や授業を参観して、町の一貫教育に向けた研究に取り組む。

4 研究組織

園長 倉澤良一
研究主任 中村孝枝（年少組担任・ふるさと教育担当）
年中組担任 櫻井ゆか（外国語教育担当）
年長組担任 山田 雅（ふるさと教育・ICT 教育担当）

5 保育参観・研究協議の様子

（1） 外部講師や指導主事を招聘して年間4回の保育参観等を行った。

- ① 6月12日(水) 年長組
- ② 7月10日(水) 年中組
- ③ 8月23日(金) 全クラス
- ④ 9月11日(水) 年少組

保育参観では、園長を含めた全教員で保育の様子を参観し、それぞれの幼児の動きを観察し、その内にある思いについて考察した。それぞれの見取りは協議において確認され、それぞれの幼児の理解の深まりにつながった。中学校の教員も保育参観に参加し、その見取りや感想は付箋に残され、協議の際や

連携に生かされた。①には外部講師、②④には外部講師や県の指導主事③では外部講師とオンライン研修で1学期の保育の様子について協議した。

(2) 園内研修会の様子

年間10回のKYT等研修では、全職員が子どもの危険を予測し、大きな事故に繋がらないための力を身に付けることや子ども理解、支援の仕方を検討している。毎年継続してきたことで、職員の子どもの理解が深まり、日ごろの保育に生かしている。

(3)神奈川県公立幼稚園・こども園協会や民間団体主催のオンライン研修も7回行った。

6 実践事例

(1) 5歳児 はと組「カメの世話をしよう」

昨年度の5歳児から引き継いだ当番の仕事のひとつに、カメの世話がいった。幼稚園には何年も前からクサガメが2匹いて、しかもかなり大きい。5歳児が代々餌やりを行っていて、今年の5歳児もその世話を引き継いだのだ。

カメは、網のふたがついた大きな水槽に入れられていて、その水槽は裏の畑の隅に置いてあった。カメの世話といっても、当番の子どもたちが毎朝餌やりを行うくらいで、それ以外は子どもがほとんど行く場所ではなかったため、餌をあげるだけの存在になっていた。

そこで、せっかくカメの世話を引き継いだのだから、子どもたちがもう少しカメに親しみをもって世話をできる方法はないかと考えた。まず、子どもの目の届かない場所にあったカメの水槽を、園庭に移動することにした。子どもたちに提案すると、「いいと思う!」「みんなで運ぼう!」と勢いよくカメの元へ走っていった。

カメがかなり大きいので、水槽もなかなかの大きさである。子どもたちが運ぶのは簡単ではなかった。すると、「用務員さんに手伝ってもらおう」と、用務員の姿を探し、「用務員さん!今日忙しい?」「カメの水槽を運ぶから手伝って」と自分たちでお願いしていた。用務員が手押し輪車を持ってきて、水槽をその上に乗せ、子どもたちが支えながら一緒に園庭まで運んだ。

水槽の移動が終わると、次は掃除。水槽を洗う間、カメを水槽から出したのだが、普段水槽の中でじっとしているカメが園庭をのびのびと歩き回る姿に、子どもたちは大興奮。あっちへこっちへとカメについて行き、甲羅を撫で、愛着が湧いてきた子どもたちは「ねえ、名前何にする?」と話し始めた。みんなで相談して、「まめた」と「チョコちゃん」という名前に決まった。

子どもたちが世話をしやすいように、水槽は保育室の前に置くことにした。すると、登園した子どもたちが進んで水槽を覗き、カメの様子を観察するようになった。また、戸外遊びの際には、「今日まめたとチョコちゃんを外に出したい」と、時々水槽の外に出して、触れ合う機会も多くなった。子どもたちは、カメを固定遊具のところに連れていったり、砂山に登らせてみたり、かわいくて仕方がない様子だった。「まめたとチョコちゃんのカメレースだ!」「歩いた、歩いた」「まめたは歩くのが速いね」「でもチョコちゃんはゆっくりだよ」と、2匹のカメのことをじっくりと観察していた。子どもたちは、カメと触れ合う中で様々なことを学んでいった。

【考察】

当番の活動を考えるにあたって、子どもたちが自分たちの園生活をより良くするための活動にしたいという思いがあった。今年度引き継いだカメの世話も当番の活動のひとつだったが、餌をあげて終わりではなく、生き物として大切に育ててほしい。

カメの飼育環境を見直し、子どもと一緒に改善したことで、これまで餌やりだけだったカメの世話が、子どもたちがカメに興味をもって進んで関わる姿へと変わった。そして、環境を変えたことで、子どもたちがカメに親しみを持ち、生き物として命を感じながら関わるができるようになった。

秋の運動会ではカメのおみこしを作って、子どもたちがみんなて担ぐことができた。また、卒園間近に

なって、冬眠から目覚めたカメに気づいて「まめた、チョコちゃん起きたの?」「元気でね」と話しかける姿も見られた。1年を通して優しさが育っていることがうれしかった。



(2) 4歳児 ひばり組「やりたい。やってみよう!」

5月に入り、友達と同じ場で遊びながら、同じ動きを楽しんだり、友達に遊びに関心をもったりして、自分の遊びに取り入れる姿が見られるようになった。また、友達と関わり合いながら「ごっこ遊び」を楽しむ姿が見られた。

5歳児から「クラスでお化け屋敷を作ったから遊びに来てください」と声を掛けてもらい、遊びに行くと、とても楽しいお化け屋敷ができていた。保育室に戻って来ると「ひばり組でも作ろう!」と言って、早速自分たちで作り始めた。完成すると、異学年を招待してうれしそうにしていたが、5歳児が「全然怖くなかったあ」と言ったことで、次は5歳児を怖がらせたいという思いに変化した。どうやったら怖くなるのかを考え、天井からお化けを吊るしたり、保育室のいたる所にお化けを貼ったり、お化け屋敷の地図まで作ったりして、工夫して考える姿も見られた。

2学期になり、お化け屋敷ブームはひと段落したと思っていたら、ハロウィンで仮装をした楽しさから「自分たちがお化けになって脅かしたい」という思いが芽生え、衣装を作り始めた。遊び続けるうちに色々なイメージが出てきて「迷路にしようよ」「暗くしないと怖くないから新聞を貼ろう」「窓からも明かりが入るから、カーテンを付けようよ」「星も付けよう」と、子どもたちからたくさんのアイデアが出てきて一緒に作り上げることができた。「ママにも見せたい!」と言う声があがり、みんなて絵を描いて招待状を作った。また「来てくださった方にプレゼントを渡したい」とお礼の手紙を書いていた。

いよいよお客さんたちが来ることになり、子どもたち同士で役割分担をしていて、案内係、お化けになって脅かす係、音響係、ゴールでお礼の手紙を渡す係に分かれて遊びに来てくれたお客さんたちを歓迎していた。2学期最後に5歳児が遊びに来てくれて感想を聞くと「怖かった」と言ってもらえて大満足だった。

【考察】

子どもたちと一緒に考えて進めていくことで、自分たちのお化け屋敷として主体的に取り組む姿が見られた。この経験を通して子ども同士のイメージが重なり合い、考え、話し合い、作り上げる喜びを味わうことができた。また、自分たちで役割分担をすることで、それぞれを尊重し合いながら自己発揮できる機会となった。そして、自分たちだけではなく、参加者みんなが楽しめるような活動になったことが何より素晴らしいと感じた。

子どもの遊びは色々な形に変化していくが、保育者はそれをよく観察し、一緒に楽しみ、興味関心に沿った環境を準備し継続していくことが必要だと思う。また、保育者の意図だけで保育を進めてしまうのではなく、子どもの興味・関心やこれまでの子どもの姿をもとに、子どもの思いと保育者の願いが重なり子どもが主体的に取り組めるようにしていくことがとても大切だと改めて学ぶことができた。



(3) 3歳児 つばめ組「バスにもなるよ。船にもなるよ!」

入園して1ヶ月、園での生活にも慣れ始めままと遊びが展開されるようになった。遊びがさらに広がることを願い、大型段ボールの家を作りたいと思った。死角がないようにドールハウスのような中が見える形のを2つ作っておいた。登園後気が付いた園児が「おうちがある」と喜びながら家に入った。しばらく座っていたが、「おうちの中をきれいにしたい」とビニールテープをペタペタとA児が貼りだした。はさがうまく使えないので手伝うと、B児が「先生ここに窓をつけて」と言った。C児は折り紙で折ったチューリップを家に貼っていた。思い思いの装飾をしながらごっこ遊びが展開されていった。

それから1週間経って、2つの段ボールハウスを向かい合わせにして組み合わせておくと子どもたちの興味がさらに増し、「中に入れるよ」と段ボールハウスの中に入っていた。段ボールハウスが簡単に移動して形を変えられることがわかるいろいろな形に組み合わせて遊びを展開するようになった。

その後も遊びの中で風船 T ボール用の手作り教材(発泡スチロールでできた棒とお皿を組み合わせた物)をハンドルに見立てて段ボールハウスが車になった。♪「大型バスに乗ってます」と歌を歌うと一緒に口づさみながら「どこに行きますか?」「小田原です」「お城に行ったことあるよ」「水筒持って行かなくちゃ」と傍らに用意しながら体験したことを話していた。また、ある時は段ボールハウスを寝かして船に見立てて魚釣りをして、バーベキューにして食べ、今まで遊んできた遊具を自分たちで取り入れながら遊びを発展させていった。

段ボールハウスは時にはクールダウンの場所にもなり、いろいろな役目を果たしながらボロボロになるまで子どもたちの居場所となった。

【考察】

物の用途にこだわらず、何でも遊具にしてしまう視点や車や船に見立てた子どもの発想に驚かされた。面白いことを遊びの中に取り入れていく姿に他の子どもたちが興味を示し、子ども同士がつながってさらに面白い遊びをつくり出していった。その楽しさを共感し支援していく姿が主体的、対話的学びに発展していくことを実感した。

意図的に設定した教材でも子どもたちは想定外の使い方をしたり子どもの感性で扱ったりする。子どもの遊びを予測して必要になりそうな物を用意しておくことや子どものしたいことを実現できる場を構成していくこと、遊びの場を一緒につくっていく大切さを改めて学んだ。



7 実践の成果と課題

- ・園内研究の中で外部講師や指導主事に具体的なアドバイスをいただき多くの学びがあった。夏休みにも、オンラインで保育に関する課題解決のための質疑応答の機会も設けた。また、年間を通してオンライン研修により、園内で研修に参加でき学ぶことができた。
- ・KYT 等研修や朝の打ち合わせを通して保育の振り返りや子どもの共通理解ができ、全職員がチームとなって保育の体制を共有、支援することで園が子どもにとって安心し自己発揮できる環境となってきた。
- ・遊びの時間を十分確保することで、興味をもった遊びにじっくりと向き合い、試行錯誤をしながら繰り返し遊びを楽しんでいる。遊びの中で異年齢児が自然に交流し、互いに良い刺激を受けながら育ちあっている。
- ・サークルタイムで、子どもとの対話、聴く、伝え合う、振り返るということを大切にしてきた。子どもたちから出た意見を尊重し、それを実現していくために一緒に考え実行してきた。運動会や発表会、園外保育などの行事もサークルタイムで取り上げ、5歳児中心となって企画、調整していくことで充実感や満足感を味わい、自信が付き、自発的行動へとつながっている。
- ・子どもたちが散歩や買い物、園外保育を通して真鶴の自然・行事・人などとの関わりを感じることができている。直接体験を通して新しい発見も増え想像力も高まり、遊びを作り出し発展させていくきっかけとなっている。
- ・ICT(タブレットやデジタル顕微鏡)を保育に活用することで子どもたちが自分たちの動きや自然物を詳しく観察し振り返りながら学びや感動を共有することができた。
- ・今までの園での取り組みをタイムラインや写真等の掲示により子どもの様子を視覚的に記録すること、また、新たに保育ミーティングを実施したことで保護者に園の考え方や保育を理解してもらうことになった。

8 今後の展開

(1) 今後の研究の方向性

- ・今後も子どもたちと生活を共に作りながら子どもたちが遊びを生み出す環境を整えていきたい。また、遊びの様子の実態を捉え、子どもたちと共に環境を再構成していきたい。
- ・ICTを活かして今後も子どもたちの興味を深め、遊びに対する探究心や意欲的な活動につなげていきたい。さらに子どもが夢中になっていること、おもしろがっている場面などに着目し、ドキュメンテーションを用いながら研究を深めたい。
- ・小学校との架け橋プログラムに合わせた3年間の保育カリキュラムを具体的に検討する。

(2) 課題への対応

- ・少子化に伴い園児数が著しく減少するので、異学年交流や他園の交流も進めていき自分の思いや考えを進んで発信できるようにしていきたい。
- ・ICTやホームページなどを活用して、一人でも園児が増えるように、幼稚園の良さをもっと保護者や地域の方に伝える努力を継続していきたい。

